KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

ホ 2
947
3
ヨ

京都大學圖書

かざし抄下

不盡谷氏口傳　門人　吉川彦富　山口高端　筆受

る　留連

[る] るんじとは心を也。里言に[そち]といふ。非情のものをさしていふ。古言のまゝおほくよみ八代集にはまれにいひてよく
六帖 あさくまのすむといふなる志賀山せめてとふともなる石には
古 うごきなするゝる里もあまたあれど擬かまれぬよりものなら
[るれ] [る]よりわかれど例のあり／わけくるそてずともゆるさ
なり。里[そちるで][そちゝ]といふ
古 ちはやぶるうぢのはしもりなれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば

947
3

手 さてもぬれきまし明の空に鳴ちどりかくやく月にはねられずや

なりく

なし 里 なまなり なまじひ なまじせ なるぞよ

古 あつまられたる室の中山なけかくはなかく人をもしめるらん

旧 いそぬかとなるの中にも中にはんにらひと思ひまうなれ

又猶ぞて けつく ふくして なるぞいのまゝなれ

拾 ともまれ風のよるふそまつ柳のいとはなるやうくみたれてなげける

旧 かすれぬる君はなるかつかれて今まていけるかなそうらむ

これをもいつれも なるの中のことふ と里すれば心もとつらぬ

なりて

なぞと

なぞも

なぞや

なぞ 里 なんぢやの とらゑの詞にはあてはめし

とがめてる詞なり

拾 ぐちぬ人のこひしきやなぞおなかつなされしまはかんな花咲よるもゝ

旧 こともなぞ室をみちてあたまし林のよのなぞや月影の人をよめるか

なぞと と の字からくむはずべし 是 なぞで とこゝろえてよむべし

乃中にいきて下に落る名をいふべきかよめり

古 人まつむしなくなやなぞとあめのまちかくれともあらず

ね 志るしなきぞなるとは心のよるなまでよあらず待ぎ

なぞも 里に なんぞいのまゝあ とらゑなるり

古 かつらも火にあさぬ数夕成るぞもかく深み川日ちりそてゆくん

旧 いくよりも物にしわつらぞなぞまかくあまのかるかもちらせる

なぞや 里 なんぢやぞいの とらゑ なぞで よりも一際つよき詞や

於 ことのねいるぞやかいるとこ（何ギヤイ）るとてあるとうれをなつとめ（スミツテ）ハ
羽 あさちよけさわくもあの宝けるかあ（テエニヲタ）ハ（何ギヤイ）るそやこうき
るとて なとう るとう るとて なとてか

なとて 墨 るぜるぜよ といつ ろくとぐめろぐひる復り。
但あのうへはそび事れよろつり
古 るとりせ（シタ）能ちそ能かる（モセヌニ）なと（ナゼ）郭あろろんあん（テエモタデフロ）
ね 人ちきこ男ハそけもをてなとこ（ナゼニ）かろあ（イジ）きろれ 関

るとう るどハよ同ど かハ乃字例の下へまんてなるべ。
又ハぜうと尺してもなるどかぐきとつ復り
古 うきこせよハかとさやうともみるる（モセヌニ）なぜ（ナゼ）わるれ出（ニウ）てみする
於 ゆるろれめあ利もゆ（イニくく）しイニをろつ（カギツテ）なぜカ（ナゼカ）をなとろ者ろ海ろ

なとか 墨 るぜぞいの とい るどろ よりもつよくいるるり
ね 今まてなるとうハ花ぜろ（ナゼイノ）すでよそとせ海り墨ちりハすろ
るとて 墨 るんでどういるけで とつ
於 あさこ行りとくるまなきれよりるとてそいつ浸るろん（ナンデ デルルデロジ）
伊ドウ云ワケデコヤウニ るとてくあさろうこうあよくん水わろきとむよりあを（テエニヲタデアロジ スイイ シタ）
なとてとて るどて乃ろ行るり但とひぞめて墨ろ人を
させろ行ろとやろ公あり。墨 るんで何ぞいの とつ
楽 みちよへてすりけるあのぞるを（モノギヤノニ ナンデ カギツテコレハニタ）でうハわとりもはるつけてあけん（タンジイ）
るよ なふて るよせんよ なあう るにうも
るにーか 何とて 何そ ハ 何そ ハ るにう なるか
るの。 墨 何ーよ 又 何のあよ とつ

古 花よあてるよ（ナニシニ）かゝるん（デアロウ）女郎花なれかうるのへよねるまり（テニハウモイヤノニ）ぬを
は ちらぬ（ナニシニ）ぬきてぬきて（タ）人もるまし（イノ）ぬをるよ（ナニシタメニ）山路のあそこすん（デアロウ）
又里言よるのぎ（ナニシニ）をうにあるけふぐ（デアロウ）にあるぞ

ぐうもくのの 何ぐと るよりの るどらくろ也
をか 何を 何とる るどよあるぐひられなるで

るよ るとかるのぐ也仕すうとぐむるをそへり
なりもん もらしとなるる

古 あひらひふ（スミヨツテ）ひらそぬ（何ヨリ）ぬられるせ川何（ナニシニ）よるあてちいそあげん（クフデアロウ）
は 八重むくさて（テ置タ）けをとさて（今トナツテミタ）るふく（ナニシニ）倒くゆてまちけん（タデアロウ）
於 るよせん（ナニシニ）よ命をかけてちひん（フタデアロウ）ひくとやと（イキタイ）ちもるそり（モノヂヤ）
は 何せん（ナニシニ）よむ（タデアロウ）ひそめくん（タデアロウ）いくろれ松ふくるきかのとまるく（シリ）

又なうるくぬるあり るよ乃條下まつぐ 何よ
うせん るどよめるもぬ

古 むすひ（タ）ぬきて（ナニヒ）かるみ乃ら（ナニヒ）るり（イニシテミタ）せん何よまの武るをすし（ウモダ）
は あまそて何ふ乃ら秋ふるよせんよみくもら後乃ふくさあすよ（ミモセヌニ）

なるか るにりる るふ いづまるよれる ふとある
ふるり るふうをて るふよと男て うハ例の下ま

何よ何ぐい乃と里ふ る乃よまあ る乃かて ハ

古 あつまちぬさ乃中山るくよる（ナニカ）ふ（ナニシニ）人をもひそあくし（タデアロウ）
は ハきつせれ食きゆを何（ナニシニ）うも人めふくんのせ紀ちむん（ルデアロウ）
於 人ちるま事（サ）てなきを何（ナニシニ）ふ乃ちるくふ乃ちとまれなるぬん（テニシニ）

拾 なにはかた人もききてこそはしく摘ところなる林乃山さと

なにとて 里 何とかいうて 又 どう云た事で と云意也

本よりとがむるにや大かたは なにとて と同しこれからつよき也

拾 難波乃ことそ何せむ摘にまかりけれ何とて人はあさみつらむ

詞 といふ心なりけり 家はいくかはかりにとて桜はかりをそめけん

なにしに 里言 どうしに摘ぞ どうしたことぞ といふ心なるべし

於 **なぞ**の事なり

簾かともにふる人ぞ我宿の花は何そやりわすれかね紀か

なにせむ 里 何ぢやいうてこそ とふかやうなるいつめ

古 かへる山なにそはありてあるかひは来てもとまらぬ名にこそ有けれ

ふる里のれ詞や

旧 命やはなにそは露のあたものをあふにしかへはをしからなくに

なにかは 里 なんの といふ 摘下に ぞ とうくる也あり

古 すすきのなかやいとのをよりてまつ人に我みは恋しきかなしかれ

於 これらさきもなきりきされともにはよりはなへ

又一例 里よ なんのいな 何もいるさはいふ とふ 文ま

かかくかく詞也うるそていふなり

後 あつまの人のまなこあてにありとみやいらふ何をもて

又ひとよは何のことしかるへきそよあるは常に 何 そ

かさしてとはいへり

なにしに るいのとはずてそ例のといつめたる詞也 里り

なんの といふて下に ぞいの とうけてみるべし 新古にある

何のあやめとなぐく世中にとよるもなふらといてく
かくらぬをなのめぬべし

古 むそ玉式部日るふかくさんうつにふもあるぬつをに

花 花しあくいるようはまりをりんくるとくふなけるもあり

又何のうの一例のやうにいるるもあり墨よなふいふる
ぐあらうぞいのといふ也

木 ヒキ、リ 何云ガロジイノ 何ハカハ、ハタ

ゑこつるよふるく何ハいて何ハいあれいまてかいけきあるすい
なへて

六

るへて墨ぐしらるるにうるめてるどいなくぐいまて
るしるりにあ体へかけるるふるり つまてろうとあべ

古 梅花ろれるとたくるこのあくるるるるるへてふれて

七

あそふわるひろりるへてのよるもうこつる
なふ

るふ 凡花ハするらなれるるふるれて るふとかくぐるを今ハ
なをとかくいあやるわり中ごろの世までも るふとかこるく
へるを所下ようち花世よるきこぐへりとねがゆなりとハ
木のまぐわるふなどもるくすぐなるやうにかぎりあるく
ありけるるるる也古今ともるふあるぐるどよあり
文よもかくかくり

於 ヒ タ 何ミズ ベニモサク タビ者ダガ

ひ花ちまをくるをちへするある
伊物よるるくぐありけるる文るか人るどいるで一とるり
るそ別してもなるるる也こるるより猶ぐでかぐーとるる伝

いはゞこゝろは花かみだるゝは春枝を折りてぞかゝしきな
ふしを見ざるに松枝なるどもさえ木は春よあらで花も
さず枝のこずゑもかのいろをうつしなりず今かし
くそあるはするうらなかりとのいや。里よ［どうでも］［とかく］
［なつぞり］なるどらよ
於みをとある花のさかりにかへるゝよ(ドウデモ)すさそと思(ガ)やゝしき(イカ)
姫せき山のあなたの枝もしるゆかしとあるゝは(ヤハリ何カ不知)なをえるけりける(ウタヒモノヂヤ)
はいその山のさくらも花もあかぬ(ヤハリ)なるゝとにこそ(シヒハチガフテ)あるゝあかれ(ルモギ)
いそのゝ松のいはねにおふる草は枝いかなりての草枕
かゝるすらひなれどもふるの家だりはさあらじとせず。
なそり枝のあらひをうしなはねをよめり。又はのぞ枝

るぞ枝がひよよめるもどうでもとかくかうせずやとおほひ
すゝや。又はかやうによかく例のことわりし。又言よ［まず］［いまず］
とよむと［枝］とよむさそるのぞ似たる所ありつゞ(か)かな
おひてそうべし。ずくはいまず言ふりつまずごゑぞふる
るどよそでも似まずまめぬいをわらてよあり枝ふる言
とよめぞ春ちかるにどりのこさわてふる言をそへり
ぬひあり。又後の世りは里よ［枝さく］とらゆやうによめる
［まず］はおぼろくとらあぬいあり［なか］はうらいぶよやめ
まかりしか色うにうわるも新古今の宣長のよもやあるき
うらは気色への里言の［なか］とわかすでやうになりける
むかしの枝もなく花もあかぬ古きさとに枝出ひきて松風そよく

ぞや

〔ぞや〕里〔なるぞや〕といふ俗言にあつる詞ある時〔ぞや〕〔ちやと〕といふ

古 今ははや恋しなましをあひ見んとたのめし事ぞいのちなりける

拾 すこのみよそて見ゝくれは袖ぞ身をしる山よりいでにける

ほ 犬ぞやまきしかたの山の小松ばらいつかはそれもちよのかげ見む

拾 このめはる（?）にあるにや都よりおちよとさらみちのべにまつとつげなん

ぞよ

〔ぞよ〕〔ぞ文〕の合なり。但家持卿よりやうやうよみそめたる詞なり。おほかた〔よ〕〔ぞ文〕といふ也とする説もあれど、外の例をみるにかなはず。これは里言に〔文〕

はや何せんといふよりいできたる也。儒書の古訓に將の字を〔はた〕とよみたるは此はやと同じ。擬古文の類にも此かく詞の中、又は末などにおけるぞおほき。それもさるかたにはいへど、おほくはおろかなる人のをこがましう、今の里言にいふばかりをかきていとをかし

古 かくばかりをしとおもふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへぞうき

拾 からころもすそてかへしてみよやはれとわがいひし事

〔都也〕〔はた〕とよみたる詞も〔はた〕は里言に〔はたまた何〕

〔はた〕とせうといふ詞ありて、古今とこゆ。かの詞のうちにも、此代集の歌に

みえたる文

新 わすれなんよにもこしぢのかへる山いつはた人にあはんとすらむ

つらぬきとうらみとゑる心あるをりにやさしきむかしのむかしよ
これらは里言に［これは又］又［のとらみてうけは］とらふ也
けふり後世にて見えるもの也伊勢物語にあるがごとし
ものへてはとかくり行文にわかりしげ例ひをまし畢竟て
ゑるは「つま」を［えやまと］の合といふなり
ゐてく

［へて］
かくへてといふ心を略して里にて［久しうして］［久しう］
［あひて］とらへ
おのつかくるやとをつるを説のことはへてのみすかすかりける
ことの風も心地いするをは試するに松はみよりへていちる竜を
おのづかるのものは夢といふより［へて］とつかくれとおもふとは

なくるものでも但見は今にてとらんへきにあらねば
ゐさすらに　ひてをの

［いさすらは］里は［いちむきに］［いちずに］とらへ心をかくり
みすて一方よりて縁をかくもとるなり
ゐさすらにひとひそぬかめるのはの山に行へしけれ
ひたすらにうらめしいふ心絶の身はあかぬまでふたはちきりけめ
又後拾遺に行のひたすらにぬかれ離れとよめるは
ゐさすとかけるもさる詞の意をよく見ゆるもあらへ

［ひたすら］［ゐさすら］とあるで心の今すら一方をさしいふ
て方よりものひくみてるやうに沿の道ふくきこゆる也里よ［しつうは］
［かうこうきうは］るどといへり文はわかる人るどらは心をよろしと

かくるもひなれるよむごまをいつ
坂うくれもかるきまのをひこ（ヒキ、リニ）ゆるよ和をも人乃ちひすらん（デラ呂）
伊みよ行くれむろかりもひらぬ（カタ一サウニ）ゆるよ者こうかくそよるとなる（何カシラズ）（ゾイ）
まくら

まくら

二例ありいづれも墨言を又といひるくり一例又
かりよ乃ゆ（ホド）
伊和ろり物やて人ら又も（サケ）あひ（ルイ）ともへて水乃下にもあるもけり（ルモノギヤ）
千ひ和するもト宮の神宮ゆ（又外ニ）まくれるりとも乃中山（バイ）
二例又ちかつり（ドモ）つてび乃ゆ
坂そ（タ）よりみ（テニヲタ）ひるりめ月乃（竟リ）くれ又山乃ろり入毛（ドモ）に（テニモタイデアロ）ゆ
日あ所（ニ井テ）まくれ（テニヲタ）ゆよ利め（テニヲタ）義ちを又を（又タビ）ろ（テニヲタ）ゆて（テニヲタ）れ（テニヲタ）

古今よみて又まくれ（テニヲタ）れごとよあるとハ
一例乃又るり下ハ二例乃又るりらもかくハ又ずれも
これめきりるるやうるれば二例只ハつよかへる也
まくら　まくらき

まくら

墨因いまぐ（ヒ）とかりゆ也上古ハまぐ（ヒ）とよまびゆ也
祝のうちあるよりもて（テニヲタ）まぐ（ヒ）ハまぐ（ヒ）ずよりあり（テニヲタ）ちを世
よハ又いまぐ（ヒ）とよまぬやうよ和れるハ只むり今れわる
るりさてかのづくまぐ（ヒ）ハまぐ（ヒ）ようかるくときこゆ
古文ゆくまくまくよハる（ハヒニテ有ニ）月ぬ（テニヲタ）ゆるをやれ（テニヲタ）ゆつこ（トコ）ろよ月やとるん（デアラウ）
坂ひつ（テツ、ケリニ）まくハいそめぬ和こひをかるり乃ゆ為ちるゆ（テニヲタイ）
まくれ墨くやうく又まづ（ヒ）ハとくまぐ（ヒ）ゆ和まぐき起てるど

いふをおくべきけらひまでぬふかたもなきを
古 ちる神まつりまつりけるのちるはるかぬるハ君うかよ枝やまあらん
チアザトウ 何カニズ
ちるかくそ後の世までとおもへばたイギヤ ハヤカラ きにてさへもかるつを
ナヤニ

まことに

まことに 里 ゆんよ ゆんぼんよ るどつてめて公づまてる
よりの頃やおぐてりにまのうをあるむ所よまことと
やとかきてるも此さうろそり
つよりもものやけれそうつるといふのれて
ホンニ
所 ふるまのまことにたの金いるるんりそふ部よあとふるの
シヤセンハ テウド此トホリ
枝のつくりさうそあまとちまて海ちとに人のとうそるりぬる
ヌヤウニナツテシヤラ ホンぐに
まり

里 何のうまいかてまあ 何のうまいにまあ 又 一ぞんげよ
るどつて外をたくうりておげさるるつりの公也
古 枝ふあるる枝ふもあるるるに出のねさけいまつそるのき
デヒギツテモ ナイノニ 何カナニミア 何カナニ畳テコチヤ
枝らりうそうてもんかへるるのかりるふまわる角てよけ
何カナニミア
又 ずりまづ とあるるわをべ 沢 をそて里にべし
古 まつてりのりをんてそかつりまてつきてうりつこんとて
コチヤ テモタ サキニ イイト思テ
まして

まして 二例あり一例ハ里回又 それそあるふ とるて
ソレヤアルニ テヒハウ
あれわる枝乃巻ら何ヨリモ 何ヨリモ ていまて なんぞ 巻
二例ハ里 ぐいまて るどつて
古 枝ふきれ花をそあるあるせもあをいぎいにてをとろもへ

又拾遺長歌にて秋村よりごかれてる
枝にあらどとよめるは いとんやとつ なるはうり只同ど
公乃指ごてるなり

十七

うれ　みるうら

みる　星　すきりとつ　秋　うらくてるは　ぐてるも
人よは　うれも　物よは　ぐれも　るどてれ　はむてべ
皆人とつ　初をこの　色也

花もみるちりぬるやとゆくこの　別イナミ　こそなりぬ　テニヲハナコヤ　るれ
るくるるよりみれうみとなりるんるる　清ヨ　ドコモ　テニヲハナケレド　ヤウニ　清ヨ　ヤウニ
うれうら　あべて　とるりる　同　星　ぐれるよりるるべて　とつ
古　ドレトモニ　コヤ
はこ乃一ゆるうむこうる　乃　笠はみるるあれとそみる

十八

むけ

ひと　星　うつて　ねうら　るどつ　父よはるる　何也
わすれ　人の　今東カミシウサテモ　ちりぬこと　テニヲハナケレド　イーカナ　子カラ　バヌデハナケレド
清ヨ　子カラ　ナンダコデ有カ
ちりぬこと　わるあるこの　神かる　むかるよんまれ　みるあ

十九

むへ　むへを　むへこそ　むへこそ

むへ　うべと　かくぶ　本義なれど　中どつよりはかるうふを　かるり　星

道理でとつ

古　道理デ
吹うらしれ乃　笠本れ　出をる　山見をあらとつん　デニヲハ
トニトハヤ
冬るれ　夫の　かるこの　不見はぬ　色は　むへとる　見よる　かるる
ギヤケレド　ヤウニナレバ　道理デ　ウアルモノギヤ
むへと　かるど　ゆる　歌をくつて　ずるつるる　也　星よ　乃
ヤウニナレバ
理る　とつて　むへこそ　むへこそ　もさて　むかるぶ

里よ 道理こそ 道理でこそ などいふに同じ

古 このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつばにとのづくりせり

後 ふきくるも風乃すゞしく成ぬるは秋たつ日とはむべもいひけり

同 いつはりと人をむべこそたのまれ又ふたつ成けるこゝろなりけり

拾 乃べられそまつられつゝむべしこそかすみの花も春めきけり

いむま

むま

いま といふ事也 むかしの歌人のつねは 今 といふべき詞の かなふをきこてるゆゑにやわざとよむべきにあらねば 馬よよもて乃ことあり

六帖 あつまられむまかとかへりいひあそのちくなるらわさ

蜻蛉日記 なれる全人もえるてふみちのくのむまやかきりはあらんとすん

もはら

もはら 和名抄云專訓毛波良專事ふる義也 されど常には よく文などにかゝるは今里言に もつぱら といふ詞といふなれど かゝぬやうなきこゆ 里に ふつと といふ詞なれども叶べからん

古 あなこのもはらくてぬる時こそ人のこゝろきこえも志らぬ道

伊勢物よもはらはひとつもこえきでとあるはあひくてよき

乃あつとるぬるり源氏父帝にもはらうけたまはりと

からありてとかるもふつと承らざるぬようなし也

わ　わゝる

いを 里同あてはいふ詞也 わゝそも里同

秋 あともなき[illegible]山をとみわたれからわすこらかえるかな

形 ゆ〻しかり君ども やとるゝ所まさこ 泊まなきこ 夜ふかし
仮 かりも 傘とあいうんをこ 紙すえ かくつるかくつ まつそけ 隠ま
形 さいて〜かりをこうぬる人ども あゝあり とれいへ さこ ある三毋ま
わうともよ

廿三

もんくもに 里よ **とも〜くよ** **とつよ** **ふるつ** つるを ゐと
〜ていつり **わうとも** いふ双方を ゐを〜くいつり
古 ゐうくもになきて とめまきり〜と 林の別ふを〜こ やいあゝぬ
仮 ゐるさとし 殺ふこゝゆくといふめるをいこわ とにわれつこて
やくと

廿四

ゐくと 里言 **ゐごとあて** 又 **せいぐて** とつ事ゐうて今も
やくと といふい **わざと** とつべゐあうまきこゆよ あゝ人ゝき

樣 れまて乃命もし 沈まの あゝ ふを 屋くとやくう 泊
セイダンテヂカリ
やくとのゝ 枕乃下ま ゐれて ゐうこえを ぬとこ ゐうか

廿五

やうや やよ
やうや **やよ** ゐさこてゐうぶ ぶよびうけつる 泊里 **ゐれうう** とつ
古コレナウ
屋ゐうやまて ゐかゝゐ ゐとつゝん 和ゐのゐうよ 住ゐうひぬゐよ
源インクワニ廿モ
いゐやくもいうよ めをなゐやい ゐむゐうる 屋ゐうゐ ゐとゐ人屋ゐこ
ハ
ゐうゝん ゐゐうゐ ゐゐやよい ゐうまゐこゐ ぬ人乃まこゐうゐやん
デクエラウ コレドウ ドウギヤカ ウヂ
形ナウ
やよゐゝく 泊ゐゐ 和乃ゐ イニシテミタラ ゐりやこ ゐ楽乃 反よ 何を 深ま
ウモヂ

廿六

やゝ
やゝ 里 **ようと** **ようぷと** ゐるどゐつ
反
萩乃ちを屋 ヨホド こゐうこよゐ なゐるこ ゐ乃ゐ ゐつ ゐゐるゐ
ナゼ ヂヤノ ウルデアロウ

秋ふけぬるもやはるのきりぎすとこの月
やうて

やうて 里言 ろくまくよすぐして ろくもるとぶ かぞいとの
乃ひかあるをうくまこるぶみ乃事のあふと
ありるの世とへ二條と冷泉とゆぐまれあるう
二条ゆくとて冷泉ハ乃るれぶその事をもなこまへる桂
乃ひをいてべし
こてもいうそもいうのひちくまこゆるれやうてかまつ秋のゆるれて
わうの事この形乃世てうとよもて屋とけるわすれ草に
より形山やうてとてとうを花ちりあとと人やるたうん
よりや

より 里言 よりく 又 よのいと ともいてぶとかるうの事ぶり
とてせんうとるれぶよきみてうちすてうる何也
えうきこ乃事のよぬうんととれいをあようもう人ハ校ぶうくみよ
よりくそうハ浜とうちぶかうぶいそもを人めを世てかもりそ
よりや 金 いうちぶめうる何や里 よのいうて よのいう乃 るぶよ
よ乃河ちうや人をてけらかうあとを屋ちひてう事ふとれうて
ぶうれてそいもれ山乃中よかうるよりれ川乃よりや世中
よりも

よりも よりく よりくも いうまもとうと とけうう八代乃中そ
ハ千載よりも和山ぶくれとうみうるのぶうけうど
るきを屋うなまで見もりとうもやまでとうをふく

めづれど、なほずゑやさて よそは よそ よりおほく よそは、
又 よそ よりもたゞしき詞也。これを略きて今の よも は、
里言に おそらく何ます といふ詞なり
ちりもよもとまりし給ふめり。営るべき物ならずとも
何のひとよもあらじとさへ思ふやうに、すべき命なるべき
よそは、里言に けつして何ます といふ
よそこめて聞ゆる程などもよいあらじ物絶えゆるさし
よそも は、里にどうぞ事があつても何ます といふ
かきくらしもこれほどもあらじ秋風も
わすれなむよそもあらじちかへる山のあれんと思ふらん
本意は世にうたれぬさまにて不思議の事は、あれども見よ

かぎりてさふあるべきなれど、又
よそもうれしけれどもひるき世は、似ぬ世なるべきなど
いふ詞みだけなるべきとれど、後にひとりひとりてなるべし。
世といふ詞もあるぬやうになりぬれど、一首のうちに又世
の字をよそにいれたる事もありあやしむにはあらず。又
里言に よそや よそり するどのうちに、いふけ詞なれど よそや
こまいひ よそもうし まろまいるどのはいむかるべくぞ見れなり
転じて よそや くるであらう よそもうし まうでまうするどの
事、ますやうなるゆへ、又 よそも よそは ものゝ詞は自他にかゝりて
いふべきを、里言はなほ他を推する詞なればかく詞の
中に用ゐれもかゝりてこゝにかなへるにかへりて

まぶつ〳〵うるべられて今よのもとのめり
て尺をぬるり　よをへて

よ〳〵ゆよ

世

ちらてりよ　星　ゆんぐの事中　とらて

古子ンガ子ンゴウ　よ〳〵わよるうしれてゆくるうろ八金をうろ〳〵ぬみるうるデルルギヤ　クリ

何ナニラズ

ゆ　う〳〵むれとうつまて君うよのとゆ子ンガ年中とゆたいうよりでつしわるるん

ゾウリハ

よをへて　星　ゆんぐもの　とらて

古ヒテル　うつためよりてうゆ反布ゆ　ギヤヤラ　ナン年モ　よをへてうしとうる人ゆるき

ハ　風ゆ今とわもうゆぬ白ゆうろよ　ナンヨンモ　をへてゆるつる水うそあり　テ何ナニラズ　ルルギヤ

樂　もうゆのようをへてうるくゆ　イクヨモ　池いまとうるゆ波ゆうゆ　一ヨリ　バカ

ゆ捨ゆうろのいくゆもの　うろよあり　いすゆ八世界をも

世代をも年をも　よ　よくいられば　よて　よて　よくゆよ

よをへて　なぶみるうゆ　ゆうりできうる　紙るれど　ぬよ　紙

ゆいひるれてゆ　ゆのようん　とらんぶる　ぶてとうまでぬよく

ゆぶ　ぶてゆぶすもつ　ゆ乃乃也　彼時代みようみゆ

あれば一例として更へ

世

わきて

わきて　僅　とりわきて　又ぶんぶろてる　どて　アべて　乃うゆ也

数あるゆめ中をうれ〳〵ようえうりわうる　ぶるり

月かをいゆの光乃あきのようをわきて　ギヤニ　ブンダッテ　こゆろ八とうゆ　ヒカルーギヤ　ちりゆ

チ　大空ゆ乃面八わきてもそうゆ　トリワキテ　ヌスレド　とうるゆ雲ゆ八行の　リウ　ソレクノ　うゆ面

ゆるのくゆ

あたら 里因 [あたら事なる] ともいふ

於 あたら夜の月と花とをおなじくは心しれらん人に見せばや

同 おなじくは君とならびの池にこそ身をなげつとも人に見えめ

花のう　か乃つの志つ　花のまる　か乃清かう

あたらの 里よ [自分乃] 又 [自分の] といふ 又 [あ乃] がよく花のかなし

花乃ちりまくるぞ下りかへる詞のつきたる時は心をなるて [めでし] 又 [あたらしき] 乃と僅にべし

於 春の野にあさる雉の妻恋におのがありかを人にしれつゝ

同 ゆきつもるおのゝとしをはいはでまさへあはれと思ふころかな

おのづから 里 [めんくらうに] といふ 又 [それもしく] ともいふべし

文みはかならずかならず詞なり

於 秋のいろはよもの山よりおのづからくれてもちるかもかする

おのさ 里三例あり 一例 [おのてまへ] といふ [おのが] をぞいふは

かへりておのづからみづからの上をあらはしてかく里に

於 我かへる道のくろ駒心あらば君はこずともおのれいなゝけ

於 うき世にはあるはかなくて菊の花おのれひとりぞ咲けりける

詞 風をいたみいはうつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな

此一首はみづから乃事に落るれど上の句にて我を

波のうへをさしていへる詞乃めづらしき所なれば

人はこれをうたがふべければかくのごとくなり 二例 里 [我とわがでは]

又 [おのれと] といふ

於 おのがみちせぬとぞ老乃山もとの麻衣おのれとからで杖をたよりん

續千 雲風ハ花ちるつくもふるあめ日よ花のあらうろめさそふ雨

山例度せうハ彩ヲ初ハ。又まさく[なのれ]とよまあり。

苦ハみんぬ初也。二例里[ゐてまへぐり]とよまれも後

世のちるもと

千三 風あるす山田の雁よ秋田ハ除ハ。やなの月をみるぶん

彩千ヲ彩ハ系 山のつよかいをあちをを紀をあて花あらうろ〜きく花

[ちるりうら]俚同。又[ちやぶんと][ひとりぐよ]るぐらく

千 花ちるのちかけるを花ハ[ゐぜント]ちるあらうろめ花ちるを花をそ

彩ヒトリデニ 花つくすしのもあるから夏衣日もゆやされの雨ちるよ

又面くすよひつ音ぐらを。俚ちよ[自然]ちる

つよ夏ちる例ちるり

河 せきとめひるいとまの水も花自然ハ下にてかりのみ代ソレトハチガフテ

彩ゐぜンハ おちつくちるちるを風ちるを蓋吹まく谷乃ゆめかも

大ちる 大ちるハ

[大ちる] 里[全体又][ひとりうり]乃仙あり。肝要れのをつよから

てそ和をとを絹ちるあちよ。ちるをとあるあとあ谷

もいてちるを[大ちるの][大ちる]ちるを[大ちてよ]ちるどよあちハ結見也

ちるとト通リ ちるちるも林ちるひきけるれと霜ちるをかるん神をちるを

長系 あ〜〜のあちるもあ乃ちるを大ちるをあちるやもきてす

[大ちる] 俚[ちるくちひ〜そ][ぶ]とよ。吳今まで。肝仙とを

手ちかりてかつぎりにとを外乃程までをちめぐ

らてこれでちるちるを手ちよちるぶ。吳かちぶかうそ

せめとぶらひてくる人ぞ山伏例古今後撰の後をきくてこずえ

大くらの八月をもめてこれそこのつれ人乃れいとなるもの

ゆくゆくはなるもの我君ぬそうりんむすーのつまとなるかうん

おーなへて

わくるべて里わくるめてとけぶてあまといふ行といふる

よつけてるべてよりもかあるゆとるれりいるそ風ふきき

物をも安理よりあるーてそるるるぶとべぶるつ乃

ふるよ琴をもふんをられるるべてやとふんるど

いるーるよよ火槇つくるをといるーハわるべてや

行オレクルメテるべて光もるいるよ成るんゆるくハ月もいるを

さいるるあーるる弥もるなへてるふいるうーぬるーなへ

おさーゆ拾下終